

平成 28 年度

第 61 回 長野県中学校連合教科研究会

英 語 科

I	研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
II	趣 旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
III	参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名・・・・・・・・	1～2
IV	研究問題と協議内容・・・・・・・・・・・・・・・・	3～10
V	本年度研究会の反省と来年度の方向・・・・・・・・	11～12
VI	あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・	12

I 研究テーマ

コミュニケーション能力の基礎を養うための授業の構想化と評価のあり方

II 趣旨

「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的に育成するための場面設定や評価方法について、授業の実際や生徒の姿から、具体的に学ぶことができるようにしていく。学習指導要領を踏まえてのCAN-DOリストの作成と活用、教科書改訂による教材化の工夫についても、考えていくことができるようにする。

III 参加校テーマ一覧と参加者名、指導者名

第1分科会

<ul style="list-style-type: none"> ・指導者 北信教育事務所学校教育課指導主事 宮下佐知子 先生 ・司会者 塩尻市立塩尻西部中学校 太田 幸代 先生 ・記録者 松本市立丸ノ内中学校 岩村 仁基 先生 ・世話係 信州大学教育学部附属松本中学校 矢島 裕文 		
学校名	研究の要旨	
岡谷西部中学校	「誰もが『わかった』『できた』を感じられる支援のあり方 —授業のユニバーサルデザイン化と合理的配慮—」	五味 雅
上諏訪中学校	「まとまりのある英文の要点や概要を的確に読みとり、それらを生かして自分 なりの思いや考えを表現できるための指導はどうあったらよいか」	井出 雄太
箕輪中学校	「互いの思いを知り、尊重しあえる生徒～協働学習の中で育む伝え合う力～」	橋爪 祐一
仁科台中学校	「教科書の本文を活用できるようにするための工夫について」	武捨 冴子
附属長野中学校	「複数の技能を統合的に活用して、コミュニケーションを行うことができる 生徒の育成」	矢野 司
附属松本中学校	「人とかかわりから、自分の興味関心をふくらませ、自ら表現を求め、コミ ュニケーションの喜びを実感していく英語の学習」	矢島 裕文

第2分科会

<ul style="list-style-type: none"> ・指導者 東信教育事務所学校教育課主任指導主事 川口 伸哉 先生 ・司会者 宮田村立宮田中学校 加藤 郁美 先生 ・記録者 松本市山形村朝日村中学校組合立鉢盛中学校 棟田 晃 先生 ・世話係 信州大学教育学部附属松本中学校 宮下 昌子 		
学校名	研究の要旨	
野沢中学校	「自分の思いや考えを分かりやすく表現するための指導のあり方 ～プレゼンテーションする活動を通して～」	上野 大
辰野中学校	「相手に自分の思いや考えを伝えるための場面設定と手立てのあり方 ～話す活動を中心に～」	牛山 雄斗
戸倉上山田中学校	「一人一人が学びの充実感をもつことができる授業づくり」	秋山 千晶
附属長野中学校	「複数の技能を統合的に活用して、コミュニケーションを行うことができる 生徒の育成」	佐藤 大樹
鉢盛中学校	「学びあいの中で実践的なコミュニケーション能力を高めるための授業の 在り方」	棟田 晃
附属松本中学校	「人とかかわりから、自分の興味関心をふくらませ、自ら表現を求め、コミ ュニケーションの喜びを実感していく英語の学習」	宮下 昌子 ヨード・ヨン ゲーリュス

第3分科会

・指導者	中信教育事務所学校教育課指導主事	小岩井高德 先生
・司会者	宮田村立宮田中学校	野澤 嘉高 先生
・記録者	松本市立大野川中学校	早川 有美 先生
・世話係	信州大学教育学部附属松本中学校	内田 昌宏
学校名	研究の要旨	
遠山中学校	「既習表現を定着させ、場面に応じて活用できる力を高める指導はどうあったらよいか ～Speaking と Writing に焦点をあてて～」	増田依里子
穂高西中学校	「ペアやグループで学びあいを通して、身近なことや自分の考えなどを相手に正しく伝え合う力を育てる指導のあり方」	原 和弘
木島平中学校	「言葉を学ぶとは ～文学教材を味わう～」	有賀 康晃
高社中学校	「生徒の学習意欲が高まる課題設定と場面設定について」	別府 輝樹
附属長野中学校	「複数の技能を統合的に活用して、コミュニケーションを行うことができる生徒の育成」	井深 遥菜
大野川中学校	「生徒がまとまった量の英文を、意欲的に、そして深く理解しながら読むための指導はどうあったらよいか ～英語で行う授業を通して～」	早川 有美
附属松本中学校	「人とのかかわりから、自分の興味関心をふくらませ、自ら表現を求め、コミュニケーションの喜びを実感していく英語の学習」	内田 昌宏

第4分科会

・指導者	南信教育事務所学校教育課指導主事	伊藤 尊夫 先生
・司会者	飯田市立飯田東中学校	塚田 理行 先生
・記録者	箕輪町立箕輪中学校	野澤 昌史 先生
・世話係	信州大学教育学部附属長野中学校	木下 耕一
学校名	研究の要旨	
中込中学校	「実際に英語を使う際の必要感と Today's Goal の設定について」	上條 愛世
箕輪中学校	「互いの思いを知り、尊重しあえる生徒～協働学習の中で育む伝え合う力～」	野澤 昌史
飯島中学校	「『～できる』姿をイメージし、コミュニケーション活動から、生徒自身が高まりを実感できる振り返りの活動まで、一連のつながりのある指導はどうあったらよいか」	竹内 大輔
旭ヶ丘中学校	「どの子も分かる授業の創造 ～協働して交流し合うことを通して～」	小牧英里奈
附属長野中学校	「複数の技能を統合的に活用して、コミュニケーションを行うことができる生徒の育成」	木下 耕一
波田中学校	「生徒自ら願いと課題をもって意欲的にコミュニケーション活動に取り組むための場面設定と学習活動および評価のあり方」	武田 弘絵
附属松本中学校	「人とのかかわりから、自分の興味関心をふくらませ、自ら表現を求め、コミュニケーションの喜びを実感していく英語の学習」	片桐 智也

IV 研究問題と協議内容

【第1分科会】

討議題1 配慮を要する生徒への支援のあり方について

- ・特別支援学級には在籍していないが、通常学級における授業に学びづらさを抱えている生徒に対して、ビジョントレーニングや導入時のモデル動画の活用を行い、授業のユニバーサルデザイン化を図っている。しかし、本時ではQAの場面で「難しい」と感じ、取り組みずあきらめてしまった。（岡谷西部中）

指導者の先生からのご指導

- ・生徒の困り感に寄り添い授業を考えている点が良い。支援において注意したい点は、生徒が「特別扱いをされていると周囲に思われたくない」という気持ちに配慮をするということである。QAについては、注目する単語を囲ったり、色分けしたりして、その語の機能が見えやすくするという工夫も考えられる。

討議題2 自分の気持ちや考えを伝え合う授業について

- ・新聞のコラムを一文訳で終わってしまうのではなく、書き手の意向をつかもうと考えながら読んでいけるような学習活動の工夫を考えた。生徒は意欲的に学習に取り組んだが、授業のねらいが明確になっていなかったために、Today's Goal と学習活動が一致せず、評価が曖昧な授業になってしまった。（上諏訪中）
- ・「英語で討論しよう～反論バトル」という「話すこと」の活動を行った。相手の意見について Strong Point と Weak Point を考え、自分の考えとつなげたり、ペアで相手にどんな主張をすれば良いか相談する時間を設けたりしたことで、即興的に反論する姿が見られた。単に反論するだけでなく、相手と自分の主張の共通点を見つけ相手の意見に共感したり、自分の意見との違いを主張したりしようとしていた。討論のやり方を決めすぎてしまい、「相手に応じて」自分の考えを表現していく姿にならなかったことが課題である。（附属長野中）

指導者の先生からのご指導

- ・英文を「読む」時に「一文一文の意味を理解する」と「書き手の意向をつかむ」の2つがある。どちらをねらった活動をしているのかを明確にしていくことが大切である。上諏訪中の実践の良い点は学習指導案に「願う子どもの姿」を具体的に描いているところである。ねらいと学習活動がずれないようにするためには、願う生徒の姿の実現のために必要な学習活動は何かを逆算し必要最小限度の活動に絞り込むことである。また、一文一文を正しく理解しているかを確認するためには Fact Finding Questions による QA 活動や TF 活動が有効で、書き手の意向について考えさせるには Inferential Questions が効果的である
- ・即興的な「話すこと」の学習活動は大いに進めてほしい。2分間の相談タイムが子どもの話す意欲を高めている。「何を話すか」だけでなく、「どう話すか」という考え方に焦点を当て、生徒の「思考力・判断力」を育む視点を明示している点が参考になる。しかし、何がきっかけでその発言になったのかがレポートから見えにくい。子ども同士の関わりや教師の支援を、授業づくりに構造化して、ついた力がきちんとわかるようにしてほしい。

討議題3 複数の領域を組み合わせた統合の授業について

- ・物語「ピーターラビット」の登場人物の気持ちを考え、そのセリフを既習表現を用いながら英語で書く活動を行った。同じ叙述から異なる解釈をした生徒が、互いの発表をグループ内で聞きあったが、セリフを発表するにとどまってしまった。自分の考えたセリフを見返したり、もう一度英文を読み返したりしながら互いのセリフについて考えあったりする姿を期待していたので、原因を考えたい。（箕輪中）

指導者の先生からのご指導

- ・ねらいと学習活動が合っている。教科書題材を用いて学習展開を考えている点も良い。ピーターラビットは物語なので、絵と文章から場面の状況や登場人物の気持ちなど英文に直接書かれていないことを考えながら読むことに適している。ただし今回の評価は「読むこと」である。「そのようなセリフを考えたのは、教科書の英文をどう読んだからなのか」に焦点を当てるようにしたい。

討議題4 小中接続を意識した授業、教科書の活用について

- ・書くことに対して苦手意識を持つ生徒が意欲を持って「書くこと」に取り組む姿を願い授業を構想した。「ポケモンライティング」と称して、学習した言語材料を用いてキャラクターを説明していく学習活動に生徒は意欲的に取り組んだが、教師がねらった「さまざまな動詞を用いて作文する」ことに生徒の意識が向かなかった。また4人のグループで行わせたが活発に学び合う姿は見られなかった。(丸ノ内中)
- ・生徒の必要感に根ざした「話すこと」の単元を構想した。ALTの故郷オランダについて興味や関心を持たせる工夫と、生徒がALTとどんなやりとりをしたいかを決めだして実際に1対1で対話をした。1年生は言語材料が少なく「話すこと」の単元構想に難しさを感じる。(附属松本中)
- ・音読テストをクラス全体の前で行い、生徒同士で評価をさせてみた。また「役者読み」という誰かになりきって音読する活動などを工夫しながら行ったところ意欲的に音読する姿が見られた。(仁科台中)

指導者の先生からのご指導

- ・丸の内中の実践は、生徒が興味関心のある題材を教材化しようとしている点が良い。ただ本時が単元のどこに位置づくのか、どの言語活動をねらった学習なのか明確でない。グループ活動はあくまでも個が力をつけるために必要なものであり、目的や活動内容が明確である必要もある。
- ・附属松本中の実践の良いところは、教科書題材を教材化しているところである。子どもたちの「ALTに聞いてみたい」という気持ちが育つように単元展開で子どもの意識を丁寧につなごうとしている。ただ、教師と生徒、生徒同士の関わりの中でその子の学びがどう変化したのかが見えない。素材・生徒の研究と教師の授業のねらいがどう結びついているのかを明らかにするとよい。
- ・仁科台中の取り組みの良さは、音読を大事に位置づけていることである。音読はすべての領域を含むので、音読がしっかりできると、その子の英語力も上がってくる。映像から生徒同士、生徒と先生の関係のよさが伺える。今後は、評価項目に「アイコンタクト」があるからアイコンタクトをするのではなく、なぜアイコンタクトが必要な理由や目的を子どもたちに明確にさせて取り組めるようにしたい。

文責者 松本市立丸ノ内中学校 岩村 仁基

【第2分科会】

討議題1 コミュニケーション活動に関する指導の在り方

- ・複数の技能を統合的に活用して、コミュニケーションを行うことのできる生徒の姿を目指し、テーマに沿って自分の立場を決めた上で、ペアと自分の考えを即興的に述べ合う活動を行った。自分の考えを持つための手立てとして、「反論ポイント」を位置づけ、相手の主張への反論を英語で表現をするための手立てとして「討論表現集」と「討論記録シート」を作成し、討論や意見交換をする際に活用した。初めは自分の意見が持てずに相手の主張に反論できなかったが、記録シートを通して、反論ポイントに基づいて反論できた生徒の姿があった。相手の主張を踏まえて、その理解を確実にしたり、自分の考えを深めたりする手立ての究明が必要だと感じている。(附属長野中)

指導者の先生からのご指導

- ・ディスカッションをする学校は増えてきている。日本人はすぐに同調してしまうことが弱いポイントであり、世界的にこれからは「反論する力」を付けることはとても大切。特に相手の意見を聞いて、自分の意見を考えることはとても頭を使う。まさに思考力・判断力・表現力を高められる授業だと言える。「即興的に」というのは、現代では大きなキーワードであり、今後とても重要になってくる。手立てについて、ディベートをする前に作戦タイムを設け、相手がどう答えるか、それに対してどう返すか、構想シートを作って考えるとよい。また、会話が途切れてしまう生徒は、相手の言っていることが理解できないと考えられる。聞き返すなど、その場合の対処法を身に付けておくことも大切である。

討議題2 プレゼンテーション指導の在り方

- ・自分の考えや気持ちを分かりやすく伝え、それらが伝わったことに生徒が喜びを感じることができるよう、

プレゼンテーション活動を行ってきた。まとめとして、3人のALTに対してプレゼンテーションを行う活動を位置づけた。題材は、プレゼンテーションを聞いたALTがそれをもとに何かを判断できるものがよいと考え、生徒が地元のおすすめの店を紹介し、ALTが最終的にいきたい店を1つ選ぶ、というものにした。ALTに紹介をすることで「わかりやすく表現したい」という意欲を高く持つことができた生徒の姿があった。プレゼンテーションにかかわる指導を全学年でどのように年間のカリキュラムに組み込んでいくかを考えていきたい。

(野沢中学校)

指導者の先生からのご指導

- ・プレゼンテーションをする力をつけるためには、個々がまとまりのある内容の文章を発表することが原則であるが、1つの文章をグループ内で分担して、順番に発表するような学校が多いのが現状である。グループ活動はあくまでも個々の力をつけるための手立てであり、グループで文章を作ってそのまま発表では意味がない。本時の最後に、生徒がALTから予期せぬ質問をされ、戸惑っていた姿があったが、それがとても大切。ただ機械的に文章を発表するだけでは、4技能の統合とは言えない。また、ALTを招き、生徒が直接かかわったことに大きな価値がある。どんな相手にも臆せずにコミュニケーションをとる力が求められている現代では、ALTと生徒一人ひとりがかかわる場を教師が設定しなければ、英語の力は伸びない。ALTと生徒がゆっくりかかわる時間を、年間を通して計画し、わずかでもよいので取っていききたい。ALTを学校にたくさん招く、ということも、年間を通して具体的に計画すれば十分に可能であり、とても有効である。その際、仮に日本語が上手なALTであっても、必ず英語を使ってコミュニケーションをとってもらうことが大切。いろいろな人から発せられる英語に慣れ親しむことも必要である。

討議題3 コミュニケーション活動を充実させる指導の方法、在り方

- ・ALTに一人ずつインタビューをし、聞き取った内容をまとめる活動を行った。ジェスチャー等を駆使しながら、体全体で英語を表現している生徒の姿があり、ALTの英語をポイントをおさえて聞き取ることができていた。どのように生徒が本当に聞いてみたいことを引き出す設定をするか、またどのように生徒が伝わったと実感できるようにするかが課題。(附属松本中)
- ・教科書の対話文の表現の中から生徒が使えるものを選び出し、クラス全員にインタビューをして、クラスのお気に入りを決める活動を行った。自然とあいさつ表現を使ったり、相手の言っていることを熱心に聞き取ろうとしたりしている生徒が多く見られた。コミュニケーション活動として仕組んだものだったが、パターンプラクティスの延長のようになってしまったことが課題。(辰野中学校)

指導者の先生からのご指導

- ・ALTと1対1で会話をする時間を確保している点が素晴らしい。ALT自身が異文化の言語材料である。ここで終わってしまわずに、次の段階として、ALTの友人を呼ぶなどして、より多くのALTとつながりたい。生徒の姿は、伝わった喜びというよりも聞き取って理解できた喜びのほうが大きいように見える。とすると、今回の授業は「聞く」力を伸ばす授業としたほうが良い。4技能のどれに寄せて授業を組むかということを考えていきたい。
- ・授業の流れは良い。しかし、5、6人に聞けば表現は習得できる。とすると、もっと会話を深めるのも良い。一方で、クラス全員に聞くことで、クラス内の人間関係を築けたり、普段話をしない相手に対しても、必要感を持って会話をしたりすることができる、というような価値もある。また教師は生徒たちの中に入っていき、一緒に活動をしながら評価をすることも大切にしたい。

討議題4 Active Learningにおける指導の在り方

- ・生徒の声から、生徒同士の協同的学びの方が、教師からの講義形式の学びよりも効果的なのではないかと考え、生徒たちが計画を立て、クラスに向けて授業をするという活動を仕組んだ。実際の授業では、積極的に質問をする生徒役の子どもの姿があった。また、先生役の生徒たちも、教師に助けを求めることなく授業をやり切った。深い学びにつながった証拠だと考える。何をもちえてActive Learningと呼べる活動となるのか、教えてほしい。(戸倉上山田中学校)

- ・学びあいの学習を学校全体で実践している。それぞれの用意した写真についてペアで2分間会話をするを単元の目標として設定し、アドバイスしながら会話を繰り返す活動を行った。実際に終末では2分間会話をする事ができた生徒が多く、意欲的な生徒の姿があったが、題材の設定が生徒に寄り添っていなかったことと、会話の内容に高まりがなかったことが課題。(鉢盛中学校)

指導者の先生からのご指導

- ・1つの活動だけでも、子どもたちが授業をしてみるのはいい。相手に教えることで、自分の理解も深まる。自ら考え、主体的に協働しながら活動し、学びを深めていく学習が **Active Learning** である。まずじっくりひとりで考えてやってみて、そこで足りないことを他者と協働してやってみる。ここでまた個の力にもどす活動を忘れがちだが、そこにこそ深い学びが生まれる。「Do→Learn→Do Again」を必ず行う。
- ・どういう力を付けるのか明確にすることが大切。「2分間会話を続けること」ではなく、「2分間でどれだけの英語を使えるか」ということが力である。とすると、普段の帯活動で十分補える授業であった。写真で語るのは実践的でない。自分の考えや意見を持てる具体的なテーマを設定すべき。そうすれば内容も深まる。また、**Active Learning** も大切だが、「ねらい」「めりはり」「みとどけ」を充実させる授業展開をそれ以上に大切にしなければならない。

文責者 松本市山形村朝日村中学校組合立鉢盛中学校 棟田 晃

【第3分科会】

討議題1 遠山中学校実践発表より

- ・少人数の学校で、表現活動を行うときに、困難さを感じることもある。少人数でも力をつけていく表現活動はどうあったらよいのか。
- ・Can Do リストがあると、その目標に向かっていけばいいので、授業を組み立てやすい。しかし、実情に合わせたゴール設定になるのであれば、毎年作り替える必要があるのではないのか。

指導者の先生からのご指導

- ・教科書によって、トピックを扱う時期や学年が異なる。例えば、道案内という場面では **Crown** は3年生、**Horizon** は1年生で扱う。この学年差はとても大きい。だから教科書をしっかりと読み込み、3年間のスパンのなかで「積み上げを大切」にし、段階的に引き上げて行くことが可能である。また、それを違う場面につなげていくことも必要である。アレンジ次第で子ども達にとってよりよい活動を仕組んでいくことはできる。生徒も教師も忘れていくもの。だから3年間を通して、「ふり返らせ」「からめて」「つなげて」いくことが大切。
- ・現実的な生活の中で結びつけていくことが難しいが、I T C教育(グーグルマップなど)を使うなどすれば、工夫次第で地方の市町村の地図でもやることは可能である。
- ・Can-Do リストの作成については、文科省の資料が参考になる。そして、作成後は生徒も「何ができるようになればよいか」が分かることが大切なので、生徒と Can-Do list を共有して欲しい。

討議題2 信州大学教育学部附属長野中学校実践発表より

- ・生徒が、自分の主張をしたり、相手の主張に対して反論したりするための手立てのあり方
- ・使わせたい表現はどのように練習させ、定着を図っていくのか。

指導者の先生からのご指導

- ・附属長野中の3年間の構想が Can Do リストと連動しているし、また、次期学習指導要領につながっていくような実践になっている。
- ・今後も練習や実践を重ね、やりとりやディスカッションをディベートにつなげていって欲しい。附属長野中の取り組みと似たもので、ピンポンディベートというものがある。これを授業の最初の帯活動で積み上げていくと、けっこうやりとりができるようになる。
- ・積み上げていくことが大切。これが、生徒が英語でやりとりができている一番の手立てである。話したものを、紙上ディベートのように、書くことで正確性を高めることもできる。

討議題3 信州大学附属松本中学校実践発表より

- ・人との関わりから自分の興味関心をふくらませ、自ら表現をもとめ、コミュニケーションの喜びを実感していく英語の学習
- ・既習の言語材料が少ない中でもコミュニケーション活動を充実させていく工夫
- ・「英語で聞いてみたい」という生徒の願いを高める教材化や単元展開の工夫
- ・スピーキングテストをどのように、どれぐらいの時間行うか。

指導者の先生からのご指導

- ・生徒の実態を把握し、生徒に寄り添う考えが素晴らしい。子どもの観察から願いをくみ取って授業を進めている。子どもの姿を追いながら課題を設定してあるので、よく生徒を見ている。
- ・スピーキングテストの時間を確保するのは難しいと思うが、やはり1対1のALTとのスピーキングテストは大切である。段階を踏み、複数回行くと伸長感も得られる。最初あまり準備せずに行くと、生徒の困り感を出させ、教科書の本文を読み、もう一回再チャレンジの機会を与えることも効果的である。前回よりもアップしたポイントがでてくるはず。できないことのふり返しからやってほしい。
- ・小学校の外国語活動との接続がとても重要。類推して聞く力を高めてくる小学生が、今後単語レベルから文単位で話せる生徒に育てていくのが中学校の役割である。

討議題4 木島平中学校実践発表より

- ・文学教材を読ませ、その言葉や内容を一人一人の生徒が味わい、楽しんでいくための工夫。
- ・一文一文から背景を読み取りながら、物語や作品を深く読んで行くにはどうしたらよいか。
- ・文章を「正確に」読み取ったことをどのように観察していくのか。

指導者の先生からのご指導

- ・文学作品は教科書であまり扱われなくなっているため、生徒達に読ませていく過程が大切である。
- ・文学作品を楽しむには「音読」という方法もある。もともと読み聞かせるためのものだから、絵本などは繰り返し「音」を楽しむものもある。この特徴を生かし、国語で行われる群読に挑戦させるとよい。声で表現しようとするということは、深い読み取りをしていないと表現することはできない。音読するだけでも「深く」読んでいける。
- ・日本語訳をつけるよりも、ト書きをつけることで、文脈を読むことにつながる可能性もある。
- ・英語の歌を味わう方法として、プロモーションビデオを見せるのもよい。歌い手側（制作者）のメッセージが歌詞だけでなく、映像として伝わってくるから。授業の前に聞かせたり、歌に挑戦したりするのもよい。

討議題5 穂高西中学校実践発表より

- ・既習の表現をより多く用いて、書く力を伸ばすための工夫：異学年に（自分よりも下の学年）向けて英語で書くという設定をしたことにより、相手が「わからない」であろう言葉を類推しながら作文する姿が見られた。
- ・スローラーナーへの配慮とともに、もっと伸びたい生徒への支援をどのようにしたらよいか。

指導者の先生からのご指導

- ・後輩に向けて…相手意識を設けて英作文をしているところがよい。「誰に？」という設定が大切。「後輩に向けて」となれば、必然的に「既習表現」が使わなければならない。後輩がわかるように大切。つながりの中で「書かせている」ことが大切。徐々に情報がわかっていくことを大切にしていきたい。
- ・英語を正確に書く力をつけるには、さまざまな方法が考えられるが、モデル文を与えるよりも、一人一人に繰り返し「朱書き」で個別化していくほうが一人一人の学びに寄り添える。一人一人の力の伸び具合や考えに合わせていくことが大切。

討議題6 高社中学校実践発表より

- ・中学校1年生にとって、書くことへの抵抗感をなくして、より多くの表現を使ってできるライティング活動は

どうあったらよいか。

- ・書くことがゴールに設定されているときに、どのように技能を統合していくのか。課題の設定はどのようにしたらよいか。
- ・「共通課題」「ジャンプ課題」の取り扱い方、設定の仕方について。

指導者の先生からのご指導

- ・教科の本質に迫って考えるとよい。教科書を読んでいくと、今回の単元では、最初の2文はbe動詞、3文目から-sが生きてくる。しかし、be動詞と一般動詞を使い分けるところは非常に難しいので、そこを触れてあげるとよい。
- ・Today's Goal、Today's Point にかからせて、どうやって課題設定をしていってほしいか。Today's Goal に到達するための課題をToday's Point として生徒とやりとりをして設定する。

討議題7 大野川中学校の实践より

- ・まとまった英文を、深く読んでいくための手立てはどうあったらよいか。
- ・英語の授業を通して、英語への理解を深めていくための指導の在り方。
- ・各校の「読む」実践
 - 読み取った内容を絵で表現させる（訳させない）（遠山中）。
 - 本文のアウトライン書かせたりやサマライズをさせる（穂高西）。
 - QAに答えさせる（木島平）。
 - 読んでの感想を書かせたり、表にまとめたりさせる（高社中）。
 - 訳は使わずに図解にしてみる。／内容に沿った参考書作り（附属長野中）。
 - ストーリーの続きを考える（附属松本中）。

指導者の先生からのご指導

- ・TFに答えること、Q-Aに答えること、絵にすることなど、これは内容を正確に理解しているか問うための一つの手立てとして有効である。アウトプットさせることで英語を深く理解しているかをみることは可能である。音読や群読を聞くだけで、その生徒がどれだけ内容を理解しているかはわかる。教科書の音読にバックミュージックをつけて、生徒の気持ちを高めさせるのも有効である。音読を通して、どのように表現しようとしているかがわかる。
- ・読み取りができたかできなかったかへのアプローチは珍しい。答えの根拠に下線を引いていく方法は何を根拠に、どの英文から読み取ったのかがわかるので、日常の普通の授業の中ですぐ活用できる実践である。また、根拠をもとにして考えることが大切。
- ・長野県にも震災から避難してきている生徒がいる。そういった生徒に寄り添いながら授業作りをしたい。

文責者 松本市立大野川中学校 早川 有美

【第4分科会】

討議題1 目標設定から追求・まとめに至る生徒の意識付けについて①

- ・Today's Goal と振り返りの徹底がされていなかったため、年度当初学校でそこに力を入れていくと決めた。Today's Goal の設定の場面で生徒の声からGoalを引き出す工夫をしている。また、Today's Point に関してはその日のGoalに向けて何をしていけばよいかを考えさせることにしている。（中込中）
- ・小学校からの積み重ねで動作を伴う活動を通じて英語を習得していく傾向がある。人当てクイズをする場面でTVなどのキャラクターを題材にするよりも、学級担任等身近な人を題材にした方が生徒の必要感に迫ることができる。帯活動で言語活動の時間を確保していくことで1時間の中で4技能を使うことができる。また、ALTが日本に長く住んでおり、生徒の実態を把握してくれるため、勇気を与え、自信をつけることができているから大変ありがたい。（波田中）

指導者の先生からのご指導

- ・生徒に必要感を引き出すためにどうしたらよいか。Lesson Goal の達成に向かう単元展開の中でその題材に寄せて生徒の必要感を出していく。例えば町紹介が Lesson Goal であれば、単元の中で「学校の中にあるものを言おう」などの there を使う活動を積み重ねていくことが有効である。また、Today's Goal はモデルを示したうえで、教師側で提示をし、Today's Point を生徒から引き出していくことで導入に時間をかけすぎないようにすることも可能である。
- ・まず、授業後にどれだけ生徒と関わることができているか。教師に対する安心感があると授業後の関わりが変わってくる。これから生徒に思考を促す上で大切に、求めていきたいところは即興性・活用できる力・相手意識である。また、評価については1時間を通じてどんな姿になれば良いのかを教師側が持つておくことが大切である。目指す姿が見えたところをすかさず評価したい。しかし、全員の姿を見取るとは大変であるので、振り返りシートを Point に沿って考え、内容を充実させていきたい。

討議題2 目標設定から追求・まとめに至る生徒の意識付けについて②

- ・振り返りをしていく中で、できたことが充実していなければ、振り返りの意味がない。そのため、ペア同士での振り返りを大切にしている。ペアでやればなんとかなる、自分でなんとか出来るように、と主体性を持たせていきたい。また、前時の感想から授業を始めることができるよう、その時間の中で出てきた言葉で振り返りたい。そうすることで学ぶ姿勢も変わり、生徒の意識付けにつながる。(飯島中)
- ・国際理解の要素があり、Creative な内容になっている。つける力に対して、単元を通じて何ができるのかがこの単元では不明瞭である。しかし、ALT とこれだけ1:1で話をしっかりと作ることが普段できているかどうか。即興性と技能の統合の面からみると大変有用な授業内容になっている。言語材料は常に少ないと考え、その持っている力の中でやりとりをすることができる場面設定や内容を考えていきたい。修学旅行へ行った時に外国の人にインタビューをする、you-tube を使いスポーツ選手が話している英語を聞かせてから dictation させるなどが考えられる。(附属松本中)

指導者の先生からのご指導

- ・ペア学習は英語だからこそ言えることやできることがある。英語のペア活動は学級作りであり学級経営である。意図的にペアを組み合わせることで、支え合うことができ、授業の中で相互評価があれば考えの近い生徒や考えの遠い生徒の意見を share することができる。技能を統合的に使うために、書く活動の後に話す、話す活動の後に書く等、異なる技能を使って振り返らせることも有効である。
- ・まず、1人の生徒の様子を徹底的に追っている所がレポートから見てとれる。誰が何を誰に対して伝えたかが明確である。相手に応じて何をどう聞くかがまさに相手意識である。小学校の外国語活動を活かし、『笑顔は大切』ということも実践できている。また、教科書の題材を活かしているところも良い点である。反面、ここでは何の力をつけさせたのかが見えてこない。技能としてどこを大事にしたいかを考えていくことが必要である。

討議題3 コミュニケーション意欲を高める指導のあり方

- ・Information gap を使った時に、場面の設定は出来るが、話したいという欲求を持たせる工夫がしたい。授業開きのときに好きなものを聞いておくとの後の授業で使うことができるので使っていきたい。「アイコンタクトを使って」ということはもともと持っている能力なので主眼として用いることは難しいのではないかと。自信を持って話させるためには vision の共有をしカタカナ英語や多少の日本語が入っても良いと安心感を持たせることとパターンプラクティスを繰り返しておくことが有効である。(旭ヶ丘中)
- ・即興的に話をするために、観点を good point と weak point にし、反論バトルを仕組んだ。討論を繰り返していくことで観点到立ちかえり考えることができるようになってきた姿があった。自分たちの中では話ができて、内容を書きとることができるが、他の人の意見をどのように共有していくかがこれからの課題である。そのための手立てとしてペアで話をしている所に評価者をおく、対話記録をとり、狙っている姿がある時には教師の出を作り広めることも有効である。また、表現集を作る時には教師が一方的に出すのではなく生徒の言葉で作

っていきたい。(附属長野中)

指導者の先生からのご指導

- ・話したいという欲求を作るためには①相手意識を持たせること②型を示して話す練習をすること。③なぜ自信がないのかを分析することが考えられる。②の練習では型通りではつまらないこともあるので、頭を使わせながら言わせること、ただし実際に話す場面においては、型通りにやっても意味がないと伝えることが大切である。③では自信がないのは当たり前のことであり、自信がなくてもやってみようと思わせることが大切である。また、Today's Point は生徒から出てきたものについて「なぜそのポイントなのか」等を一緒に考えることで、クラス全体で共有したい。
- ・討論バトルは日本語でやってもおもしろそうなので英語でやってもおもしろい。観点を与えたことでそこにとらわれている生徒が多いのでリアルなコミュニケーションとしてもっと生徒が自由に話せる部分があってもよかったです。それが活用につながってくる。書く技能と話す技能を統合的に使う時には、何をどう表現するのか迷うことが多いがこの場面では内用を練る段階があるため生徒にとってわかりやすくなっている。また、ペアでの関わりが主体的で、話をするペアと相談するペアがあることで、評価する立場の生徒が第3者のように感じず、とても良い。

全体討議 これまでの発表で更に深めたいことやその他の話題

- ・小中連携
あまり多くの学校で行っていない。出前授業や中学入学前に体験授業を行う所はある。附属長野中では毎金曜日に中学から英語科が小学校で授業を行うが、これからどうなるかはわからない。
- ・アクティブラーニング
アクティブラーナーを育てていきたい。しかし、グループワークをやるのがアクティブラーニングになるということはない。主体的で対話的な活動を通じ、深い学びにつなげていくことが求められていく。active になるためには関心・意欲・態度を育てていくことである。
- ・興味を引く授業
興味を引き付ける授業は難しい。歌はとりかかりやすい。社会に出た時に使える英語を教えていきたい。

指導者の先生からのご指導

- ・中学校の教員が小学校の内容を知ることが大切である。中2でやる”want to”は実は小学校ですでに慣れ親しんでいる。小学校のスタイルとしては音から入って体験的にやっている。これからは例えば is と are の何が違うのかをまず活動を通じて体験的に感じ、その後にもまとめて理解するという流れも考えていくべきである。

(その他)

- ・Today's Point をこれからは明確に提示をしていく。
- ・統合的なスキルの使い方を目指すために、統合の日常化を狙っていきたい。
- ・Can Do list は作成し生徒と共有できるような工夫をしていきたい。
- ・これからは統合性、即興性とはどういうことかを考えて、授業を構想したい。

文責者 箕輪町立箕輪中学校 野澤 昌史

V 本年度の反省と来年度の方向

1 本年度の反省

項 目	内 容
○本年度の研究テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> ・広いテーマであると思うので、全県のテーマとしてよいと思う。継続で。 ・CAN-DO リストを意識して、評価のあり方を考えるためにはよいと思う。 ・コミュニケーションの4技能を育てるための適切なテーマだと思う。
○研究の主な内容と研究の成果について	<ul style="list-style-type: none"> ・Speaking に焦点を当てていていいと思う。 ・参考になる実践が多く、身が引き締まる思いでした。 ・本校では、話すこと、中でもやりとりを中心に研究しました。話をする観点が重要だということが分かりました。 ・小学校でも外国語活動が充実し、基礎力が高まってきていると思う。 ・成果や見えてきた具体を、参会者に明らかにするようにしたい。 ・全県の動きがもっと、各校に伝わるようにしたい。
○研究の方法や経過について	<ul style="list-style-type: none"> ・よい。参考にさせていただきます。 ・各学校で様々な問題や課題について、あらゆる手立てで取り組んでおり、この方向でやっていくと得るものが多いと感じた。
○研究会当日の運営について	<ul style="list-style-type: none"> ・文書でもホームページでも情報が確認でき、ありがたかったです。 ・メールでの連絡がありがたかったです。準備等、前もって知らせてくれたので、余裕をもって進めることができました。 ・分科会の討議が短時間で区切られていたので、とても集中できました。
○研究集録等のWebページ掲載について	<ul style="list-style-type: none"> ・HP掲載がとてもありがたかった。 ・ホームページにレポートの表紙の元を載せていただけるとありがたい。(見つかりませんでした) ・レポート書式のホームページ掲載は、会の前日までは続けてほしい。例として示されたものも参考にしたいので、掲載しておいていただけると助かります。
○本年度運営全般について	<ul style="list-style-type: none"> ・メールでこまめに連絡をいただき、早めに準備を進めることができました。分かりやすく、ありがたかったです。 ・ICT教材の活用(パワーポイント、スマートフォン)について技をお持ちの先生もかなりいらっしゃると思うので、是非教えていただきたい。 ・今回参加させていただいた分科会は、多くの意見が出されました。レポートの数が少なければ、もう少し、議論が深まるなあ、せっかく持ってきてくださったのに議論が深まらないのではないかと、司会の立場としては心苦しいです。

2 来年度の方向

○来年度の研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度と同様で。 ・Reading と Listening についても言及していただけるとありがたい。 ・英語科はアクティブラーニングをタスクの形ですでに実践しているので、「タスクによるアクティブラーニングを深める授業の実践はどうあるべきか」 ・新CSに向けて、アクティブラーニングや技能統合についてなどのテーマなど、どうでしょうか。一方で、本テーマくらいに幅広くあってもよいという思いもあります。 ・小学校の外国語活動教科化に合わせて、中学入門期の接続をどのようにするか。
------------	--

○来年度の研究の趣旨	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度と同様で。 ・新学習指導要領の変更点について触れていただけるとありがたいです。 ・「話すこと」が「2つ」になるであろうということで、そこが気になっています。 ・新CSを見据えての内容がよいかと思います。 ・英語科においては、アクティブラーニングとICTの活用は不可避と考えます。 ・中学校の先生方が小学校で生徒たちが何を学習してきているのかを知りそれを生かしてさらに中学校で伸ばす、つける力はどうか。
○来年度の研究の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度と同様で。 ・全県で共通のCAN-DOリストがあると、やりやすいかなと思います。 ・教材（ICT、フラッシュカード、ワークシート）などの共有化による多数のサンプルから、有効な手立てを追究していく形はどうでしょうか。 ・小学校へ参観に行ったりすることはどうか。
○その他、改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> ・年々、参加者が減っていることもあるので、レポート提出が原則でなくてもよいかなと思いました。または、1枚指導案のような形。 ・参会者減少の要因の一つに、多忙化によるレポートの負担が挙げられます。レポートの簡素化など進めていくべきではないでしょうか。 ・参加者の減少に伴い、分散会の数を減らす方向も検討してもよいと思いました。 ・本研究会がどういうものなのか、知ることができる機会がほしい。 ・参加者が多くなっていくとさらによいです。連合の魅力を伝えていけるようにしたいと思います。 ・会場に、パソコンを用意していただくとありがたい。(持参でなく)

VI あとがき

本年度も、県下各地からお集まりいただいた先生方の熱心な発表と討議により、長野県中学校連合教科研究会を大きな成果をあげて終えることができました。

終日にわたる研究会において、終始温かく示唆に富んだご指導ご助言をくださいました、指導者の川口伸哉先生、宮下佐知子先生、小岩井高德先生、伊藤尊夫先生に心から御礼申し上げます。また、綿密な司会計画を立て、討議を深め、研究会を実り多きものにしてくださった、司会者の太田幸代先生、加藤郁美先生、野澤嘉高先生、塚田理行先生、ご多用の中、当日の記録及び研究集録のまとめにご尽力いただいた記録者の岩村仁基先生、棟田晃先生、早川有美先生、野澤昌史先生に深く感謝申し上げます。

ご参会の先生方には、レポートを持ち寄り、多数の貴重な実践を基にしながら、熱心にご協議くださり、この会を終始盛り上げていただきました。ここに、ご参会のすべての先生方の、今後の一層のご活躍を祈念申し上げ、御礼といたします。ありがとうございました。

教科委員長 宮下 昌子
副委員長 木下 耕一